

財団だより

# 多摩川

1994.3 第61号



ヨシノボリ（クモハゼ科）  
中流部の早瀬や平瀬の礫底に生息する。



右手の程久保川から引き入れた生態水路。奥が多摩川本川  
(H 5年10月撮)

## ■多摩川現風景■

### (17) 程久保川の生態水路

浅川の多摩川合流点と接するように流れる程久保川の河口に、1本の小さな水路がつけられたのは昨年春である。程久保川の水を多摩川に導水するためのコンクリート護岸壁に穴を開け、生態水路と称する川原に掘った素堀の水路に河水を導いている。洪水時の水は、流量が多いから直接多摩川へ流れ込むが、平常時の水は、この護岸の穴を通して蛇行しながら多摩川に至る。

このアイデアを思いついたのは、地元日野市の住民グループで、河川の専門家は思いつかない発想である。魚とりや水草の生える小さな水路が欲しい。そのためにはどうすれば良いか？という単純な動機で、このアイデアに対し河川管理者も了解をしたらしい。工事は日野市の水路清流課が行

ない、しかも低予算で実現した。前号で挙げた調布のワンドや日野市の小学校の親生物水路づくり程大がかりな工事でもなく、ちょっとしたアイデアで川が面白くなる好例であろう。

### ●関連する財団の助成研究（No.は報告書番号）

〈一般研究〉

#### ①河川敷利用形態の違いが与える多摩川（下流）の自然環境への影響。

1993年 島池美帆 多摩川環境調査会(No.81)

#### ②多摩川流域におけるトンボ類の生息場所の構造に関する研究。

1992年より研究中、長田光世 千葉大学

## 多摩川散歩

### ●寺沢川（大栗川水系）

多摩丘陵の自然を守る会 石黒富江

多摩丘陵自然公園の雑木林を源とする寺沢川は、川の三方を囲む丘陵の谷戸や林から染出す水を集め、大栗川に流れる2.5kmほどの短い支川である。地図の上にその名を探すのは難しい。かつて多摩丘陵のどこにもあった里山を流れる小川の一つである。しかし、今や、貴重な存在になってしまった。

多摩動物公園下車、多摩テック（遊園地）方向へ又は中央線豊田駅下車、多摩センター行バス多摩テック下車。多摩テック入口を右に見ながら車道を登り、峠を越えて下る。杉の植林が迫り暗い道だが、やがて谷戸が右手に見えてくる（車に注意）。多摩テックの南側斜面にあたり、現在も水田や畑が耕され、養蜂家も訪れる。谷戸の四季折々の表情も美しいが田植えの後の青々とした稲田はさすがしく、後世にも残したい文化の生きた姿だと思う。しかし現実には多摩ニュータウン開発によるこの一帯の農地潰しに抵抗し、近隣の市民と共に農業とその環境を守り育てていこうとする人達によって存続している状態である。

道をさらに下ると視野が広がり丘陵の向こうにニュータウンの団地群が見える。反対側の団地からここ堀之内を見ればその景観は今と昔ほど遠い、自然か開発かを問うているように思われる。

農家の前に来ると十字路に出る。左斜めに入ると旧道である。牛小屋が並ぶこの道は野猿街道へ通じる。旧道に沿って連なる丘陵のニュータウン区域内にトウキョウサンショウウオが生息している。産卵場としての湧水の溜まりと生活場としての湿った林の確保を公団に意見書とし

て出した。

旧道と反対側の右へ曲がる。前方左手の牛小屋の先の川に沿って左に折れると寺沢川本流に出る。ここより付かず離れず川に沿って歩いてください。

橋から下流はすでに暗渠化が進行しており、上流は一部河川改修されている。改修の計画を聞き、現地で白く乾いた三面コンクリート張りの護岸を見て仰天した。すぐにもこれより上流については、排水路ではなくフェンスのない周辺の自然環境を保全しながら川づくりをするよう八王子市へ要望書と代案を出した。寺沢川は部分的な護岸補修はなされているが自然の姿が残っている。カワセミの巣穴のある関東ローム層の崖、川辺の屋敷林や竹林、栗林、野草など景観が見事であるばかりでなく、大きく蛇行する流れや川もづく、蜚も生息している。専門家によれば大きく蛇行する川がそのまま残っていることが貴重なことなのである。

広い車道に出る。右方に東薬大、構内を抜けて平山城址公園へ、前方川沿いに行くと寺沢川水源地の東京農工大波丘実験地へ。左方は南陽団地を抜けて、十字路を下れば野猿街道へ、上れば長沼緑地公園へ。



## 私と多摩川



昨年TAMAらいふ21協会による多摩川の一斉清掃に参加したボランティア (二子玉川の兵庫島で93年4月18日撮)

クリーンアップ全国事務局 小島 あずさ

小学生の頃に、母から「子供のころは多摩川で泳いだのよ」と聞いて信じ難い思いがした。

何故なら、当時東横線の車窓から見下ろす多摩川は、合成洗剤のあぶくが雪のように舞うきたない川としか写らなかったからだ。昔は綺麗だったと言われても、そんな古き良き姿を想像することはできなかつた。

都心で生まれ育った私には、残念ながらふるさとの水辺と呼べる場所がない。小鮎釣りしかの川は歌の世界でしかなく、淋しい限りである。

初めて、生きて光っているホンモノの蛍を見たのが玉川上水のほとりだった。

オタマジャクシを自分の手ですくったのは、秋川渓谷である。

こうして振り返ると、心の中にふるさとの川という意識はなくとも東京都民を30数年やってきた自分にとって、多摩川との関わりが意外に深いことに気づく。

自覚は薄くとも、多摩川の流域に暮し、その恩恵を受けていることがよくわかる。

ましてや近年は、ゴミ拾いという市民活動を通

して、多摩川にもどっぷり関わっておりました。縁は異なるものである。

「多摩川クリーンエイド」という流域一斉清掃を実施したのだが、会場毎にゴミの状況を調べてみたらいくつかの事実が浮かび上がった。例えば、橋の下周辺には必ず空缶がたくさん落ちている。これはたぶん、橋の上（の車）から投げ捨てるのだろう、とか、釣人のマナーの悪さは天下一品で釣餌の袋があれば、必ず弁当殻も一緒に落ちている、といったように。

こうした状況を一一つ検証し、改善のための資料を作ることが目的なのだが、人の行くところゴミあり

の状態を見るにつけ、ヤレヤレと溜息がでてしまう。そんな時は、原因はわかっているのだから改善の余地はあるのだと開き直すことにしているのだが。

ゴミを調べて歩くのは楽しい作業とは言いがたいが、そのついでに多摩川周辺の自然を再発見するというオマケをもらった。

鳥の声、かわいらしい野の草花、水の中の生き物たち。やはりなんといっても、百聞は一見にしかずである。

そして、自分の足で歩いて初めて河原の広大さが実感できたし、護岸工事で直接水辺へおりられないもの足りなさを味わった。

過去からの第一印象が洗剤の泡、そして現在がゴミというのでは、多摩川が情なさに涙してしまいそうだが、蛍を見た日の感激やオタマジャクシをすくいといった興奮（なにしろどちらも夢に見た）を、いつまでも覚えていたいと思う。

今、ゴミ拾いをしているのは、近い未来にもっとすてきな多摩川になってもらうためのお手伝い、なんて言ったらカッコつけすぎかな。ゴミを拾うために下ばかり見るのじゃなく、ゆったり自然を眺めたい、というのが本音である。

# 甦れ！多摩川

## ■ 五反田川を行く

財団法人 環境浄化財団 専任研究員 山道省三

小田急線百合ヶ丘から北へ約1km。なだらかな丘陵地は所々に雑木林を残すものの、五反田川の源流は新しい住宅地の中から突然始まる。

五反田川はあまり馴染みのない川だが、川崎市麻生区細山地区を水源とし多摩区の小田急線向ヶ丘遊園駅の近くの追分橋で、二ヶ領用水本川に合流する。約5km程の川は、ほぼ全川にわたりコンクリート護岸とフェンスに囲まれた典型的な都市排水路である。中途かろうじて古い改修タイプの護岸が残された東生田小学校付近も垂直護岸に改修工事が行なわれている。

源流部は旧河道であったろう蛇行そのままに、高さ4～5mにも掘下げた三面貼の水路は、生活排水のため水質が悪い。そして、周辺の宅地開発の影響による洪水調整のため、源流点から400m程下った所に巨大な調整池が設けられている。まさにコンクリートのプールで普段は水が無い。調整池のあり方も少し工夫すると市民の水辺として充分活用できると、今各地でさまざまな試みがなされようとしているが、西生田小・中学校に隣接していることだし、水質改善や生物園等の活用ができないものだろうか。そこから150m程下った所に、二枚橋の文化財の碑が立っている。源義経伝説であり、弁慶、伊勢の三郎などによる二枚橋

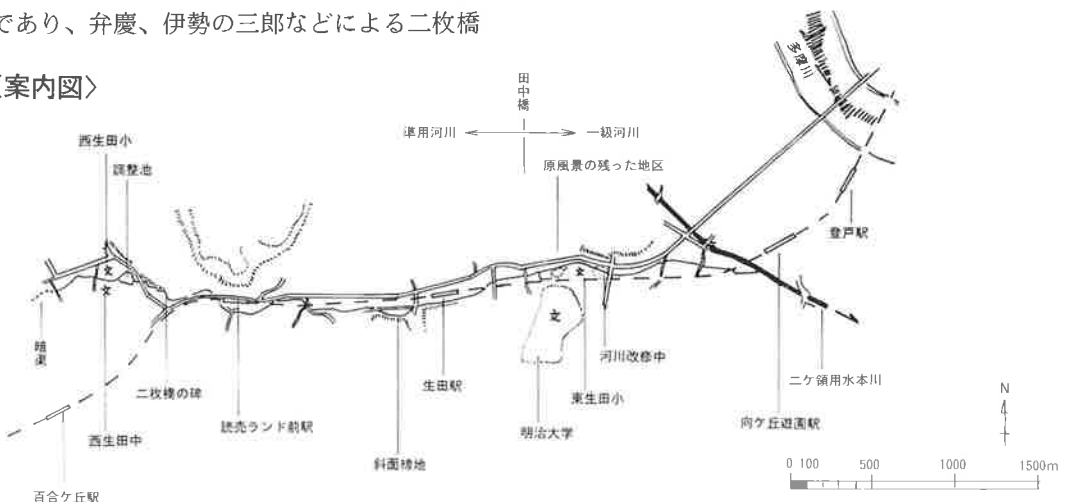
の由来が記されている。

このすぐ下流から、五反田川は小田急線を縫うように右に左に蛇行しながら下っていく。いずれにしる排水路の形状でしかなく、歩きながらひどく疲れる。単調な河道、瀬も淵もない河床。それでもマガモやカルガモが川底でエサをついばんでいる。しかし、生田の駅裏のように魚巢ブロックや魚道、魚見橋といった施設があっても魚影は見えない。

五反田川は源流から約3.3kmが川崎市の管理する準用河川で、生田駅から約500m下った田中橋で一級河川となる。この田中橋から約400m区間は右手に田畑が残り、未改修区間となっかろうじて五反田川の原風景を彷彿とさせる。しかし、すでに下流から改修工事が行なわれ、東生田小学校前まで進行している。小学校の校門前の護岸はなだらかな勾配で草が生え、階段がある。この川全域を通して唯一、水辺へ近づくことができる所であった。そして、子供たちが書いたのか、土堤の所に、カルガモとユリカモメの小さなカンバンが2つ立っていた。せまりつつある垂直護岸工事に対するささやかな抵抗とも皮肉とも受けとれ、これをどういう気持ちで壊すのか、いたたまれない気持ちになった。

すでに改修の終わった向ヶ丘遊園近くの川には、河川愛護の精神育成とやらで放流されたのであろう緋鯉が小さな落ち込みの中で静かに泳いでいた。

〈案内図〉



## 財団からのお知らせ

### 〈研究助成報告書完成〉

助成集報（20巻）並びに多摩川環境調査助成集（第14巻）が完成しました。

#### 助成集報第20巻

研究課題	代表研究者	所属
●安定同位体を利用した玉川上水における浸透量と脱窒量の評価	田 瀬 則 雄	筑波大学地球科学系講師
●多摩川下流及び河口域における有機スズ汚染の動態	竹 内 正 博	東京都立衛生研究所理化学部 部 研究員
●明治・大正期における多摩川流域の水車分布－水車台帳の作成と水車諸産業の存在形態	鈴 木 芳 行	国税庁税務大学校資料研究室 研究調査員
●多摩川下流域底泥における硫酸還元に関する研究	瀧 井 進	都立大学理学部助教授
●多摩川下流域における化学的水質汚濁に関する研究	落 合 正 宏	都立大学理学部助手
●多摩川の表流水および河床付着層に生息する細菌群集の存在状態の解析	森 川 和 子	東京農工大学一般教養部助 教授
●多摩川流域の神社分布の特質とその信仰形態をめぐる研究	牛 山 佳 幸	信州大学教育学部助教授

#### 多摩川環境調査助成集第14巻

研究課題	代表研究者	所属
●多摩川下流部における水質の変化	桑 原 正 見	武蔵野女子学院高校教諭
●多摩川中流域の屋敷林の研究－特に玉川上水周辺の屋敷林の構成－	秋 山 好 則	都立武蔵丘高校教諭
●多摩川上・中流域の動植物方言調査及び動植物と人々のかわりについての民俗学的考察	岡 崎 学	はむら自然友の会
●「水みちマップ」作成の為の調査研究（野川流域の湧水と地下水の流れの関係について）	神 谷 博	三多摩問題調査研究会
●多摩川にやさしいライフスタイルの研究	鈴 木 敬 子 大和田 順 子	日本ヒーブ協議会

### 寄贈文献の紹介

#### ●「魚の目は泪」－魚と俳句－

井上まこと 著 1992年 (株)恒星社厚生閣 発行  
 魚の行動を研究されている水産学者の著者が俳句に出てくる魚を題材にエッセイにまとめ、また著者の随筆のうち魚と海に関するものを収録している。

#### ●「東京湾」－100年の環境変遷－

小倉紀雄 編 1993年 (株)恒星社厚生閣 発行  
 東京湾の過去、現在、将来の100年間の環境の変遷を水質・底質、藻類・底生生物・微生物、窒素の動き、生態系モデルと水質予測等について12名の研究者が分担してまとめている。

#### ●「河川生態環境工学」－魚類生態と河川計画－ 玉井信行・水野信彦・中村俊六 編

1993年 (財)東京大学出版会 発行

本書は土木工学、水産学、生態学、景観学  
 各々研究者が魚のすみよい環境について論じて  
 おり、また巻末に用語解説、文献紹介があり一  
 般の人にも理解しやすく配慮している。

#### ●「水と生命と地球」

半谷高久・小椋和子 著

1993年 (株)小峰書店 発行

本書は児童書「環境と人間」シリーズの四巻  
 目であり、地球化学者の両先生が水の循環、水  
 の機能、水の性質、環境学習等あらゆる角度から  
 「水」について平易に解説している。

## 第7回 「多摩川実査」を終えて

11月12日、財団主催による第7回「多摩川現地実査」が行われた。今年のテーマは「環境用水としての川」である。最近、川という空間がわれわれ都市に住む人間にとって非常に貴重な自然空間であり、これを見直そうという動きがある。

建設省でも平成3年度より「多自然型川づくり」を全国約600箇所ですべて具体的に事業化を図っている。また地方自治体も積極的に親水施設の充実を行いつつある。今回は多摩川及び支川について実際に現地を見ることとした。今年の行程は次のとおりであった。

### 1. 丸子川親水公園（世田谷区）

小泉次大夫吉次が開削した六郷用水の一部である丸子川をよみがえらせ「みどりのみずの軸」の拠点とする計画。再上流部から岡本公園、静嘉堂文庫を経て谷戸川合流点までの約0.9km、国分寺崖線の豊かな緑を取り込んだ親水公園。

### 2. 仙川礫間浄化施設（東京都）

野川、平瀬川の礫間接触酸化法による浄化施設が河原に設置されているのに対し、河床の下に設けた点、これから狭小河川に応用できる新しい試みである。浄化された水は谷沢川の最上流部に導水され中流部の等々力溪谷を流れる。

### 3. 野川いこいの水辺整備事業（東京都）

小金井市、三鷹市、調布市、世田谷区をまたがり流れる野川を「緑の水辺」という基本テーマで環境整備を行う事業である。

水車、せせらぎ、緩傾斜護岸、魚だまりといった人が親しめる空間づくりを目指している。

### 4. 多摩川中野島自然石護岸（建設省）

川崎市多摩区中野島地先にあり法面を緩い勾配で施工し基礎に巨石を用い洪水による浸食を防止している。

### 5. 上河原河岸整備〈ワンド〉

多摩川中流域である調布市染地地元にある。NHK地球ファミリーでも紹介された、この地域は魚類相が豊かであるが、かならずしもすみやすいところとはいえない。そこで人工的に淵（ワンド）をつくり魚にもやさしい川づくりをとの計画である。

### 6. 浅川・程久保川合流点ワンド（日野市）

洪水時の氾濫原であったこの地に市民の描いた一枚の絵が現実となった。市民の行政に対する働き掛けによって実現した良い実例である。

### 7. 向島用水（日野市）

子供達が身近に自然と接する場として。潤徳小学校の北側を流れる向島用水は貴重な水辺の自然である。ここにトンボ池をつくりビオトープ（地域生態系）をつくる計画。

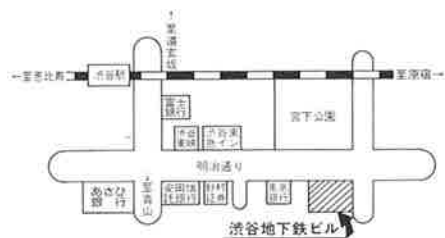
### 8. 平井川多自然型川づくり（東京都）

到着した時にはすでに日没、薄明りの中で河川改修の状況を見る。淵やよどみをつくるため自然石を用い多段式に落差をつくるなどいくつかの工夫がなされているとのこと。

バスの中での研究者の発表も非常に熱のこもったものであった。多摩自慢の雑蔵史料館の見学、そこでの懇親会、今年も多摩川の新しい発見があった。

芳村重徳

- ・発行日 平成6年3月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125